
魔王はここに

藍猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王はここに

【Zマーク】

Z6573Y

【作者名】

藍猫

【あらすじ】

死んで、気付いたら魔王になつてました。

- ・・・なんででしょう？
- 「そういう運命なんですね！」
- 「誰ですか！？」

口リ魔王が生きていく話です。

ふるわーぐです。 (前書き)

書きたいと思っていた魔王＆最強系です。

『恋』に読んで下さご。

ふるふーぐです。

私は死んだ。

何もない空間の中で私は唐突に理解する。

・・・あゝあ つまんない

やつと人生の楽しみ方つてやつが分り始めたのに・・・

ま、私なりの・・・だけどね

・・・暇・・・

・・・つて・・・ん?

あれは・・・だーくほーるか?

え・・・ちよ・・・吸い込まれる！？

私は死んで、変な空間を漂つて、だーくほーるに吸い込まれた。
私を吸い込んだだーくほーるは、役目を終えたように消えていき、
後には何もない死後の世界の空間だけとなつた。

私はこの空間で、あのだーくほーるにのまれ、別の世界に転生する そのための”私”であり、別にこれは神様のミスだつたりはない。だからといって嫌われているわけじゃない。ただそういう”運命”だつたというだけ。

ま、私は実際そんなことは知らないのだけど。

卷之三

私は今、

だーくほーるの中にいる。

• • • אָלָמָּה • • ?

ふるわーぐです。（後書き）

あつきたりな内容で「めんなさい」・・・

1話 ひじょひじょ。 (前書き)

話作るのにはなかなか慣れれないです・・・。
ハア・・・

1話 ひじょひじょですか。

・・・リリはビー?

視界が開けたら森でした。

普通の森よりも、なんていうか・・・暗い?感じの森。

にしても動きつい・・・

私はふと自分の体を見る。

「・・・は?」

なんかちつちつ・・・

手も腕も脚も・・・まさか・・・

子供になつてる・・・?

といふかそもそも私は死んだんじゃなかつたつけ?

・・・私は転生した??

…………よし。よく分かんないけど理解した。

私は唯一の自慢である並外れた適応力で今の現状に適応する。

んじゃあ今の姿にも適応しますか・・・

トテテテ と近くの湖へ駆け寄り、覗き込む。

「・・・び・・・美少女・・・」

映つっていたのはまさしく美少女だった。質素な黒いワンピースを着てあり、見た目は6~7ぐらいの小さな少女。それが自分とわかつていても、しばし魅入つてしまふほどの美貌だった。

「・・・なんか犯罪な気がする・・・」

「の見た目で中身が18歳っていうのが。

ガサツ

「・・・誰?」

突然の草の動きに対し私は冷静に聞く。何かがいるっていうのは気付いていたから大して驚くことはなかった。

「ほう・・・。なかなか鋭いようだな。子どもとはいえ魔族ってことか。」

さつきまで「こそこそ」としていた態度とは打って変わって、堂々と、意味ありげに「二タ二タ」とした男が出てきた。厳つい風貌で、背中には大きな両手剣を背負っている。二タ二タとした目に私は無意識にゾクッとする。

「・・・魔族？」

「あ？ その黒い髪と瞳は魔族の証だらうが」

湖は少し濁っていたから色まではわからなかつた・・・。

「・・・それで、なんの用？」

「・・・何つて、決まつてんだろ？」

男の目つきが怪しく光る。

森の中に、

なんか嫌な予感がします・・・

・・・じりじょつ・・・?

1話 ひじょひじょですか。（後書き）

・・・あ

名前、まだ一度もでてませんね・・・

次ぐらいでだすと思います

2話　ひやつあです。（前書き）

「どうしよう」が最後にくるよつて
なんだかんだで頑張っています。

「道案内してくれ」

「……………は？」

先ほどまでの二二タ二タ笑いが消え、真剣な顔で男が言ひ。まさか、これほど予想外なことを言われるとは思わなかつた私は、10秒ほど口を開け、啞然としてしまつた。

「いや、だから道案内を……な？」

「…………いやいやいや…………何でです？」

「迷つたからに決まつてんだろ？他に理由があるか？」

「…………ないですね…………はい」

緊張していたことが恥ずかしい……私は脱力し、溜息をつく。そして、目線を男に戻し改めて見て、気付く。男からにじみ出る黒いもや。またにやりとした表情になつてゐる男は気付いていないようだ。

・・・」のもやもやとした森の影響？・・・大丈夫だよね？

「どうかしたか？嬢ちゃん？」

男は怪訝そうに聞く。私は思いつきり不安そうな顔をしていた様だ。そのことに気付き、すぐに初対面用の作り笑顔を浮かべる。

「いえ・・・特に何もありません。・・・所で、何故こんな所で迷っているんです？」

「」がどこかも分かつていらない私が言えることじゃないな・・・。

「・・・ちょっと人を探してて森に入ったんだが気付いたら迷つてたんだ。」

「うそですね？」

「！？」

男の顔が驚愕に満ちる。

人を探して森に入った？こんな危険そうな森に1人で？・・・ありえない。

道案内？こんな子どもに？馬鹿じゃないの？

仮にこの森が危険じゃないとしても、その大きな剣は何のために？

おかしいことが多すぎる。それに道案内を頼むなら、何故隠れる必要がある？

・・・今なら分かる。あの男からにじみ出る黒いもやは嘘を吐いた証だと。あの男が口を開くたびに黒いもやは出ていた。あの男は嘘ばっかりだ。じつこいつは嫌いだ・・・。」の・・・

「うそつきっ！－」

ザアアアアアア・・・

黒ずんだ植物が、私を中心に枯れていった。

今だ森の中に、

何故か怒りを表わした私の周りの植物が枯れたいきます。

・・・どうしよう・・・?

2話　ひやつせですか。（後書き）

・・・「めでなさい・・・

結婚を前にさせませんでした・・・

しかもなかなか話が進まないです・・・

3話 ひじょひなただよ。（短冊せん）

正直にいってまだ今まで前考へてないんですけど
「うーん…」ですね…

3話 ひじょうねんです。

「ハモツキハ…」

ザアアアアアアア

私の咆哮と共に弧を描きながら草が枯れる。

ただ、枯れたのは地面に敷き詰められた草だけで、大きな植物や木は私の咆哮に合わせて揺れるだけだった。足元の草が枯れたことに気付いた男は、力なくへたれこむ。

「ば・・・化物・・・ひ・・・ひいいいいい…！」

恐怖に彩られた声野太い声が当たりにこだます。

そんな男に私は無意識に手をかざす。そして力を込めて言葉を発する。

「・・・死んで？」

瞬間、私の感情と共に鳴っていた周りの木々が伸び、男を襲う。

「ああ・・・が・・・あああああああーーー。」

ブ
シ
ュ

その音と共に男の声が途絶える。

木々が戻っていく。そこには血一滴もなく、代わりに枯れたはずの草が広がっていた。男を養分にしたのだろう。草はどす黒い光を放つていて。

「・・・なに? 今の・・・」

私は今起^ひつた^{いた}ことに呆然とする。あの男を殺したのは、多分私。
木を操つたのもきっと私なんだろう。でもどうしてこんな力が・・・
?

・・・もしかして私は転生したのは異世界？

……ならさつきあの男が言つていた魔族つていうのが私……？

「ハルカちゃん、…ん？」

何かが近付いていたことに気付き、考える」とを中断する。

ぐんぐんとすゞ^シ速さで気配が近付いてくる。

ザザザザアアアアアアア

ザンツツ!!

森の木々から出てきて影は私の目に前に姿を現す。ピュオオオ
と風が吹き抜ける。

出てきたのは2人。執事服の少年とメイド服のお姉さん。2人と
も漆黒の髪と瞳で神秘的な顔立ちをしており、その綺麗な瞳で私を
見ている。

うわ・・・美形だあ・・・

座り込んだまま呆けていると、綺麗、というより可愛いらしい微笑みを浮かべた執事服の少年（10～12歳？）が手を差し出す。

「お出でになります？」

・・・ やがて い・・・ すつ ひ い ぐく きれい ・・・。

めいめいひつた空間にて、

きれいな少年に田を奪われてしましました・・・

・・・どうしよう・・・？

3話 ひじょうな話。（後書き）

主要人物はどうしても美形にしてしまつ……

願望とかじやないですよ？

・・・ 分 ・・・

4話 ものづかか？（前書き）

なかなか進まない

やつと魔王についで話になつてしまつた！

4話 まねいですか？

「あ・・・ありがとう・・・」

そういうて私は少年の手をとる。

少年は顔を赤らめ嬉しそうに私を起こす。

「アーティスティックな表現力」

さつきの男と違つて心地良い雰囲気の2人は「ああ・・・」と呟き、どう説明しようか迷つてゐるようだ。少しして少年のほうが言つ。

「とりあえず、我が城へ参りましょう」

卷之三

「はい。我が城……魔王城につつ！」

「魔王様の御付の魔族です」

・・・魔王城・・・魔王様・・・魔族・・・

ここが元いた世界じゃない・・・つまり異世界だと認めざるえない言葉だ・・・

死んで、吸い込まれて、異世界に転生した・・・と。なんでこんな事になつたんだろう・・・

「・・・気になる事はたくさんあるけど、今はまあいいか。・・・うん。その魔王城に私を連れて行つて。後、この世界にのことを教えてほしいんだけど・・・いいかな?」

前半は独り言。後半は2人に向けての言葉。

2人は快く引き受けてくれた。ちょっと衝撃的な言葉で。

「「もちろんです!!魔王様の言つとおりで!!」」

「へ?あ、ちょー?」

「わつ。僕におつかまつてこー!」

「へ?あ、ちょー?」

つかまつてつて言いつからつかまつたにのに、何故お姫様だっこするの…? しかもけつこう嬉しそうですね!?

「・・・つて、魔王つて私なの!?

「はい! 説明は後でしますが・・・確かにあなたが魔王様です! 僕だけじゃなく、ほかの魔族の人達もあなたの存在に気付いてると思いますよ。きっと

「・・・何でそう思うの?」

「なんで・・・と言いますと・・・存在が、ですかね?」

「・・・答えになつてない・・・」

「と、とにかく存在が魔王様なんです! あ、後、その膨大な魔力とか魅力とかですね」

「魔力? は何となく分かる・・・。けど魅力って? どう見ても私6歳ぐらいだと思うんだけど・・・」

え・・・何? ここの人達つてそつち系なの? うわ~、引くわ・・・

「まあその話は後でしてくれるんだよね? そういうことならはやく行こ!」

「「「はい!」」

少年の腕の中に、

あ・・・まだ自己紹介していない・・・

• • 筦 事 事 務 • • ?

4話　おひでですか？（後書き）

結局名前はまだ出てないです。

名前が出てから人物像について説明しようと思っています。

5話 へんないすです。（前書き）

実はテスト中でした（笑）

更新は日々遅れしていくと思いつので

あしからず・・・

5話 へんないすです。

「見えてきました」

少年・・・ユウの声とともに長かった森を抜ける。本名は『ユウル=ミージュル』だと来る途中で聞いた。ユウとおよび下さいと言ふから ユウ だ。もう1人のメイドのおねえさんは『メリーネル=リオネラ』で、メリー だ。

ゴウ

耳元で風の切れる音が聞こえる。

少し先には山のように聳え立ついかにも魔王城という風貌の城があつた。この辺りは晴れることがないとかで、時折雷の光で照らされる。門の前には1つい鎧の者が2人（そもそも人なのか？）立っている。

門の前に着くと、鎧が ガシャ と音をたてて跪く。（あ、中身いたんだ）

「よくお越しになられた・・・魔王様」

少し涙声なのにギヨッとする。

「ずっと待つてたんですよ。みんな」

ユウが耳元で囁く。

「・・・そなんだ・・・私はまだ子供だから気は使わなくていいよ。ところで、あなた達の名前は?」

「お心遣い感謝します。私は『オルス』でござります。」

「私は『ルスオ』でござります。」

「・・・オルスにルスオ?似てるんだね・・・間違えそう・・・。ユウとメリーミたいに姓はないんだ?」

「はい。我々のような身分には姓は存在しません。後、我々二人は間違われても結構です。双子ですので。」

「だめだよ。双子だからってそんなこと言つちやだめ!名前は大切にしないと!」

私の突然の怒りにオルスとルスオは困惑して啞然とする。だが少しして、弱弱しくもハツキリとした声で2人は私に告げる。

「「ありがとうございます!」」

私はそつと微笑み、ユウに中へ入ることを急かす。

その時の私は、ユウの言つていた魅惑の効果があの2人に効いて

いて動けなかつたということは知らない。密かにユウとメリーが頬を赤く染めていたことも・・・。ただ私は城に入つて、でかいな」としか思つていなかつたんだから。

さして豪華でもない大広間の奥には階段があり、その上にぽつんと黒いいすが鎮座していた。

え・・・ここに座るの?なんか本氣で嫌なんですが・・・。

そんな嫌な予感は的中し、私はそのいすに降ろされる。座つた途端に何かに覆われる感じがした。別に不快つてわけじゃないからほつておこ・・・

『おお〜〜。あんたが次のご主人様か〜。まあよろしく頼むぜ〜!』

頭の中に声が響いてくる。

・・・多分このいすなんだろつけど・・・うん!無視!

『それはないぜ〜。ご主人様〜〜』

悲痛つぽい声が木靈した。

変ないすにて、

なんだかめんどくせむつです。

• • • נְעָמָן • • ?

5話 へんないすです。（後書き）

少しずつ書く量を増やしてこなめます・・・

後、これは自分の思つままにやつてこないので、

話がおかしかつたりあると思こます。

・・・暖かい目で見守つてくれると嬉しげです・・・//

6話 なまえです。（前書き）

26・27日はボーリスカウトでキャンプでした。

・・・寒かったので、風邪気味です・・・。

地味に書く量が増えていきますので・・・。

6話 なまえです。

「ゴウ。」のこす・・・なんなの?」

肘掛けをトントンと叩きながらこすを示す。

「? そのいすがどうかされたのですか?」

あの頭に響いてきた声は私にしか聞こえていなかつたよつだ。多分このいすは何かが特別なのだろう。

「・・・頭の中に話しかけてきた・・・?」

つまく言葉にできず疑問系になつてしまつた。・・・いつものように頭がまわらない・・・。見た目だけじゃなく中身まで子どもになつたという感じ・・・?

「・・・声・・・。そのこす グリムゾンの声ですか?」

「そのグリムゾン・・・? かは分かんないけど、多分。」

「グリムゾンの声は魔王様にしか聞こえないと云われています。あなたが魔王であることがハツキリしましたね!」

私は ふうん とグリムゾンを見まわす。

・・・魔王専用つてことか・・・けつこうつ凄いんだ・・・

『けつこうじゅねー・めひひくひひひ凄いんだ――――』

・・・心読まないで・・・?

「どこひで魔王様」

「なあに? ュウ?」

「もう少ししたら、ここにこの国のトップが集まります。まあ魔王様のお披露目みたいなものなんですが・・・嫌な態度をとるやつ・・・方がいるかもしませんが、よろしくお願ひします。」

・・・「ウさん・・・今一瞬素がでかけてたよ・・・?

「お披露目つて・・・情報はやいんだね・・・」

『ほそつと咳く。

・・・そういうえば、他の魔族の人達も気付いてる みたいなことを言つてたつけ? 直感つてやつか・・・?

『魔族つてのは仲間には敏感なんだよ。人間とは違つてな

・・・ん? 予想はしてたけど、やつぱり人間つているんだ・・・。といつより、魔族つて仲間思いつてことか?・・・意外?。

少ししてからユウが話を続ける。

「それで……名前のことなんですが……」

ふうん？名前がどう……あ……

私、まだ名乗ってないじゃん！？人に聞くだけ聞いたって……

「！」、「じめん！私、まだ名乗って……」

「それでいいんです！」

・・・つまり名前なんか知りたくない？・・・心にひびが・・・

「そ、そんな顔しないで下さー！そういうことじゃないんです！魔王様にとつて真名まなとはとても大切ななんです！だからそんな軽々しくお教えしてはダメなんです・・・」

少し泣きそうな顔をした私にユウは慌てて補足する。その様子にメリーガ反応し、ユウを軽く睨みながら「・・・ばか」と呟いたのでユウは俯いてしまつた。そしてメリーガユウの後を引き継ぎ、説明の続きを言う。

「魔王様は代々転生者だと聞きます。ですので魔王様の真名まなは前世と現在の2つを御持ちということになりますね。」

「・・・2つ？」

「はー。あるはずです。もつらとつのねが・・・。」

「コウとメリーには教えてもらーいの?」

「え・・・あ、はー。あなた様が信用できると信じて貰わんなり。
・・￥￥￥」

今までキリシとしていた顔を綻ばせたメリーの微笑みはとても
綺麗だったと言つておひつ・・・。

「・・・ん~・・・」の世界での名前・・・

フツと頭の中に浮かんだコトバがあった。

これが私の名前・・・?

「フンノリネル＝コレイシア」

王の広間にて、

真名まなを知ると魔力が溢れ出てきました。

・・・どうしよう・・・?

6話 なまえです。（後書き）

なにか悪いといひなじは感想でお伝えいただくと

嬉しいです・・・

頑張つてなおしますのでー

『おうめ=おーじー』(前編)

今回はユウ視点です。。

そろそろ違う人目線でいこうとおもっていたので・・・

7話『エーラ＝ミージャル』

「フェノリネル＝コレイシア様……」

魔王様が……フェノリネル様が名をお教えくださいました。

嬉しいです……。ぼくを親しい者として受け入れてくださいました
ことが……。

そんな歓喜に震えているとフェノリネル様の辛そうな声が聞こえ
てきた。

「あ……熱い……よお……」

「……どうなさいまし……ぐつ……」

異変を感じ、すぐに駆け寄るつと見る、が……

「近づけない？……つ……これは魔力！？」

まさか真名まなを知ったことで奥に眠っていた魔力が暴走した！？し
かもぼくやメリーガ近づけないほど魔力とは……

パリパリ

電気のような痛みが全身を打つ。

「フェノ……魔王様！これは魔力です。落ち着いて抑えてください。」

「……これが魔力……ん~……」

魔力が暴走すると本人にも辛いもの。なのにフェノリネル様は眉を顰めつつも凜とした凜々しい顔で冷静に対処している。

その光景がどうしても美しく見えてしまう。

見惚れているのはぼくだけじゃなく、メリーも同じようだ。

少しして、魔力を肌で感じないほどに凝縮されていき、フェノリネル様へと吸収されていく。

「……うん。感じは掴めた。」

フェノリネル様の声が辺りに木霊す。

「だ……大丈夫ですか？ フエ……魔王様？」

ぼくより一足先に現実に戻ったメリーやフェノリネル様に聞く。

「うん！ 全然平気。あ、後名前で呼んでいいんだよ？ なんか魔王様って呼ばれるのなれてなくてさ……。フェノリネルは長いから『フェノ』がいいかな。」

さつきまでの重い空気が台無しのよう、明るく、無邪気な声で

フェノリネル様が言つ。

無邪気な声と無邪気な笑顔とは裏腹に、微かに向けられる殺氣。無駄に時間は取りたくないのだろう。

なら、わざわざ時間を取りれることはないのがぼくたちのやるべきことだ。

「「わかりました。ぼく／わたし の主、フェノ様」」

その言葉は誓いの言葉。

すべてをささげ、死ぐすといつ示唆。

それが魔王様に仕えるために生まれ、そしてその魔王様に惚れたぼくの精一杯の誠意。

現れるかも分からない魔王様の御付に選ばれたとき なんでもぼくが・・・なんて思つていたことが、優秀な家系だからと過度に期待され何度も死にそうになつたことが、今のぼくの忠誠の前では霞んで見える。

「ふふ・・・ありがとつ

フェノ様が綺麗な漆黒の目を細め、笑う。今までに見せたことのないような笑顔・・・ぼくはこの無垢な笑顔のために・・・ぼく・・・

・『コウル＝ミージュル』はすべてをさらげる・・・

「あなたの為に・・・」

7話『おつね=みーじーぬ』(後編)

ところが、この二つの理由に対する思ひを主にしました。・・・。

とにかく 忠誠を誓つた ということを

分かつていただけると十分デス

たまに間違つてこる所なども

直しておる。・・・

誤字が多くて、「めんねさ」・・・

「私はあなたに決闘を申し込む……」

「え～……いや～……」

私の不満そうな声に決闘を申し込んだ男・・・カイル＝バーサド（15歳くらい）が奮闘する。

まわりにはそれを面白がって見ている者、それを利用し私を見定める者、私に許しを乞おうとあたふたする者、私が男を心配する者が、わらわらとうるさいでいる。

・・・なんだこりんなこと・・・

それは少し遡って約1時間前、私がお披露目の準備をしている時のこと。早めに到着したと思われる貴族の1人息子が私が魔王だと知らずに話しかけてきたことから話は始まる・・・。

廊下の向かいからやってきたこれまた美少年。瞳は金色だが、髪

は私と回じよつに漆黒だ。

・・・やっぱ魔族だよね~?

ふと目が合い、男が話しかけてきた。・・・」これが始まり。

「おい。お前」

「ふえ? 私ですか?」

「お前意外に誰がいる? 」」のちび」

かつちーん

「・・・あなたはどなたですか・・・?」

「俺を知らないとは・・・ビ」の餓鬼だ? ちび」

ふち

「あのう・・・やつから何なんですか? 一体・・・」

「今日はとても大切な式典の日だ。餓鬼はとつとと家に帰りな。ハン」

ぶちつ

「あーーもーーーー。少しは人の話を聞いてはどうですか? それともあなたはあれですか、人語も理解できないくらいばかなクズ虫ですか? あ・・・それだと『くず』と『虫』に失礼ですね・・・

。　。　。少しほ反論ぐらこしてせどひですか？残念坊ちやま？」

久しぶりに溜まつていていらいらを発散したからか、口調が大分荒くなつてしまつた・・・。

綺麗な、誰もが美しいと思つよつな純粋無垢な笑顔で吐いた暴言は、男にはすぐに理解することはできなかつたようだ。しばし目を瞬かせ少しづつ顔が赤くなつていく。

・・・理解おやへ・・・。

「へへつーなんつだとこちびーーー。」

「つーまた　ちび　と書いましたねーーこちのくそ虫ーーー。」

「だれがくそ無視だつー。」

「あれー？まさかの字が違ひつー？やつぱりばかなんですねーー？」

そこからは完全に売つ言葉に貰い言葉・・・

1時間も2人でギャーギャーとお互いを罵倒し合つた。

気付けば式典に来た人達に囲まれ、

「私はあなたに決闘を申し込むーーー。」

「えー・・・。いやー・・・。」

といつ展開になつていた。

完全に自業自得なのだけど・・・。

魔王城の廊下にて、

めんべくわざひです。

• • • வீட்டுப் புதிய ?

8話 ついでか。 (後書き)

展開的には次は決闘になると思います。

- ・・・戦闘シーンは苦手ですが頑張りまーす！

9話 けいとうです。（前書き）

初めての決闘シーンです。。

9話 けつとうです。

「なんでこんなことに……（パート2）」

魔王城の大きな庭。そこで私は私に決闘を申し込んできたうざい男・・・もとい、けつこう高い地位のバーサド家の1人息子、カイル＝バーサドと相対している。

なんか周りの人達が囁き立てて決闘することになってしまったんだ。

・・・ああ、めんたい・・・。あ、本音が。

「フェノ様！？」

「ウ」とメリーがやつと囁きを聞きつけたようだ。

「・・・遅い」

「す、すいません・・・。

話は聞きました。バーサド家の馬鹿息子・・・もとい1人息子のカイル様と決闘するとか？」

「ウよ・・・。私はもうつづこまないよ・・・。

「うん。なんかそういうことになつた。……だめだつた……？」

今更になつて2人が反対するのでは？ と不安になつて聞く。
が・・・

「いえ。全然いいです。ぼく、正直カイル様は嫌いなので。」

「はい。私もいいです。あの男言い寄つてきてうぞいので。」

・・・なんて息の合しようだ！ 字数がピッタリなんて・・・。

・・・まあ2人がいいのなら私は思う存分に殺るよ？

「「はーー！ お願いしますー！」」

「・・・・・ハア。・・・・・と、そういうわけだから始めましょうか
？ カイル様？」

・・・『やる』についてはほつこまないんだ・・・？

そう言つて今まで放置していたカイルに目を向ける。向こうは今
の話は聞こえなかつたみたいで、眉を顰めこちらを見ていた。

「ああ・・・。決闘についてだが、ルールは一つのみ。『勝敗は
降参することで決める』だ。」

・・・では、早速始めようか。」

ルールがシンプルに一つ ということに少し驚いたが、これが魔

族の中の暗黙のルールなのだろう、と無理やりに納得する。実際はもつといろいろあるのが普通なのが。

私とカイルはしばし見合ひ。そしてどちらかともなく殺氣を放ち、それを引き金にカイルが動く。

轟つ！ という風の音と共に猛烈な勢いで私に迫る。手にはいつの間にかに握られていた剣の矛先が私に向いていた。

「・・・フツー！」

速さとしては数秒。その短い時間の中でカイルは剣を何度も突き出し、私に攻撃をしてきた。だが、私はそれらを難なく避け、自分の体の小ささを利用し向かってくるカイルの懷に入り込んだ。その滑らかな動作には無駄がなく、流れるような動きにカイルは驚愕の色に彩られた。

「つづー？」

「・・・遅い！」

私の動きに反応し避けようとするカイルに一喝をいれ、カイルの腹に容赦のない一発を叩き込む。
ゴツ と濁った音が響く。

「ぐ・・・がつー！」

カイルは体を前屈みに折り曲げ地面に倒れこむ。

「お・・・おおおおおー！」

周りの観客（？）たちが歓声を上げた。

・・・「うわ。

貴族たちの中心にて、

カイルがピクピクと痙攣しています。

9話 けつとうです。（後書き）

一瞬の決着です。

正直長引く戦闘シーンは苦手なので

これからが心配だったりしたりします・・・（汗）

10話 いやほく・・・いえ・・・わざいんです。(前書き)

意外と考えるのが大変でした・・・。

10話 じぐはく・・・じえ・・・わざいんです。

「く・・・くそおー。」

「・・・へ？」

倒れて、痙攣してピクピクしていたカイルが勢いよく立ち上がる。しかし私が間抜けな声を出したのはそのことに驚いたからじゃない。カイルの中で黒い靄のようなものが渦巻いていたからだ。

・・・うそを吐いたときのとは違う・・・魔力か?

カイルは上半身を起こし、言葉を発する。

「《燃え盛る炎の力よ・・・く炎の玉》！」
フアイヤーボール

カイルの周りに5つの赤黒い玉が出現し、カイルの手の動きに合わせ一斉に飛び掛かってくる。

「ちよつ、まつー私、まだ魔法は

。」

「そつ私はまだ魔法は使えない。

・・・てかまだこの世界に来て5時間も経つてないんですけどーーー?

炎の玉は四方から飛んでくる。

「 い、やあああー！」

私の絶叫が当たりに轟き・・・

ボション

炎が消えた。

「 「 ・・・はい？」 「

恐る恐る目を開いた私と、今起こったことが理解できないカイルの声が見事にはもつた。

いや、実際はその場に居るすべての人の声が・・・だが。

「な・・・何が起こった・・・？」

「魔法が消えただとつー？」

「どうこいつことだーーー？」

誰にも分からぬいらしくザワザワと騒がしくなる。

「・・・これが魔王としての私の力・・?」

そう呟いた声が皆の耳に届いた。

シン・・・

「?ビリしたの皆?」

私が魔王だということは全員知っていると思っていたから、私はこの静寂の意味が分からなかつたのだ。まあ中には数人ほど『やつぱりな』と頷いているが・・・。カイルに至つては、それはもう今にも顎が外れそうなほどに口を開け、ワナワナと震えている。

「・・・え、ま・・・魔王様?」

「・・・? うん何?」

やつと声を絞り出したカイルは私の返事を聞くと呆然とどこか遠くの方を見つめだした。

・・・おい。いろいろと大丈夫か、こいつ・・・

そしてふと何かを決意したように私を見つめる。そしてふー・・・ふー・・・と深呼吸したかと思えば・・・

ガツ

今までにない速さで私に近付き、肩を掴む。

「つー?な、何!?」

「！ 何をするんですか！ このくそカインー！」

「うーー、もうちょっと葉に氣をつかないよー。」

ユウの本性(?)に今の状況を忘れ、つい全力でつっこんでしまつた。

・・・だつてこの世界にきて1番驚いたんだもん。

「俺の……俺の、一目惚れは間違いじゃなかつた――――――！」

本性の現れたユウをも無視した絶叫が辺りに木靈した。

Γ Γ Γ Γ Γ Τδς. Ι

様子を伺っていたはずの観客たちが声をそろえて、しかも哀れみの目をカイルに向けていたのは当たり前のことかも知れない。だつて告白の相手は魔王なのだから。

そして私は一言・・・

גְּנָנָתָן

最上級の笑顔で、きつちり侮蔑の目で。

それを聞いたカイルと、駆け寄りつとしたコウ＆メリーが凍りついたのは余談であるとか。

哀れな人達の前にて、

これは告白されたのでしょうか・・・？

• • • எவ்வளவு • • ?

10話　「やめへー・・・こん・・・れい」です。（後書き）

タイトルを『「やめへーです。』か『やいじーんです。』の
どっちがいいか悩んだので、

混ぜてみました（笑）

「・・・ロリコン」

そんな不名誉極まりない言葉を呟く少女がいる。

俺の目の前に。

それは貴族である俺こといつとてつもないほどの侮辱だ。

いつもなら怒り狂い容赦なく魔法を無差別に放つところだ。

だが、俺はしなかった。

今日の昼頃、魔王様が生まれたのを俺は肌で感じた。父上は気付かなかつたようで、俺の話を聞き、直ぐに城に確認をとつた。普通、魔王様の存在を感じ取るには膨大な魔力と素質、そして魔王様との相性が良くないと無理らしい。

俺は途轍もなく喜んだ。貴族でのプライドとして、魔王様と肩を並べる資格があること。

直ぐに一部の魔族で式典を行つた。式典といつてもご飯を食

べるだけだが。

俺は子どものよう(まだ15歳だが)胸を熱くわくわくしながら城に行つた。

そこで少女にあつた。

その少女は幼いながらも美しく、途轍もない存在感を放っていた。そして純潔の魔族の証である漆黒の髪と瞳。少女の居る空間だけが異様な空間のように感じた。

ふと、そのあどけない表情をこひらて向けた。

・・・目が離せなかつた。

それと同時に、心をどつしよつもない様な熱いものが覆つた。

・・・知りたい。傍にいたい。欲しい。笑顔が見たい。話したい。

様々な欲望に包まれ、俺は兎に角^ア行つて欲しくない』と、強く思つた。

・・・ああ・・・これが人を好きになる、とこつことなのか・・・

?

いや・・・そんなはずはない! だって相手は子どもだぞ! -?

「おい。お前。」

気付いたら声を掛けていた。

この少女の前では弱いところを見せたくない と
ついいつも以上に悪い話し方をしてしまったことを俺はその時とて
も後悔した。だが、今では後悔していない。

直ぐに口論となり汚い言葉で罵り合い、決闘になり（自分から申
し込んだが）、拳句に見事に負けてしまった・・・が、少女の言葉
で、俺は間違つてなかつた と気付くことができたからだ。

相手は魔王様なのだから見た目は関係ない という単純かつあほ
くさい理由なのだが・・・。

だから、決闘後（告白後？）の

「・・・ロリコン」

といつも葉に固まつてしまつた。

近寄るうとしていたコウルのやつまで固まつているのを見たところ、コウルもこの少女・・・この方に心を寄せているんだね。う
ん。

昔からコウルとはライバル関係だったが（主にコウルが上）、こ
んな状況でもライバル関係になるとは・・・。

だが、俺は負けない。

いつか俺・・・『カイル＝バーサド』はこの方と共に歩む。

いつまでも俺は・・・

「あなたと共に・・・」

11話 『かいる=バーさん』（後編）

と、いうわけで

別視点第二弾です。。

だいたいカイルの一人称は『俺』ですが

決闘を申し込むときは1人の貴族として

申し込んでいるので『私』を使ってます。。

説明が遅れています。。

12話 つまつはなやつじよです。

「それではフエノ様。そろそろこの世界について説明させていただきます。」

「……やつとか……」

決闘……否、一部の魔族たちへのお披露目から一週間が経つた。

あの後、しつこじカイルをなんとか宥め（だれかが）、無事に式典をすることことができた。式典といつても、ユウが言っていたように、トップの魔族だけだったのだが。住民たちには魔王の存在は伝えるがお披露目はしないらしい。……まあ理由は簡単で、私がまだ『王』として未熟だからだそうだ。

式典が終わり、この世界のことをついて聞いていたから……

「フエノ様はまだここに来て間もないです。ですからもう少し慣れてからお教えしますよ。」

とユウにやんわり断られてしまった。

……なら何故式典はあんなに早かったんだ……

「それで……何について知りたいですか？」

「ん~……。まずは『魔王』についてかな？で、次はこの世界について……大陸とか種族とか魔法とか……ね。」

「わかりました。ではまず『魔王様』についてですが

「

「ウが説明を始める。

『魔王』……それは魔族、魔獣、バンパイア、悪魔 などのような闇に関わりのあるすべての頂点に立つ存在。しかし、もともと『魔王』とは存在しないものだとか。急にこの世界に生まれ、魔族や魔獣たちを纏められる存在として『魔王』になるとこう。

「……急に生まれる……？」

「はい。生まれる、ところよりは存在する、ところ方が合いつと 思います。」

・・・存在する？よく分かんないな……。

「あ、そういえば。この前メリーガ『魔王様は代々転生者』みた いな」と言ってたような……？」

『おー。確かに言つてたなー。』

「おおと黙つててよ。グリムゾン。』

急に話し出す。『……もとい、グリムゾンに呟く。

・・・存在忘れてたな。

「？グリムゾンですか？」

「うん、そうだよ？ ユウ。」

ユウが何かを考えるように俯く。

「……転生についてはグリムゾンに聞いたほうがいいかも知れません。」

「……どうして？」

「グリムゾンは今までの魔王様について知っているでしょうから。・・・」

・・・それもそうか。

んじゃあ教えて、グリムゾン。

『無理。』

・・・ええ。

『今までの』主人様は前世のことが話せないようになにかかかっていたんだ。俺にもこれ以上話せないよつにに露がかかる。

・・・つまりは謎つてことだな。

「わあ～・・・。全然使えないよ～！」いつ。

『・・・ひで～』

「」の異世界にて、

つまりは謎の「」ことです。・・・全然わかんない。

• • • נְרֵשָׁתָה • • ?

12話 つまつはなれりとだす。（後書き）

世界についての説明を書くはずだったのに

魔王についてで終わってしまった・・・。

なんとこりとでしゅう・・・。

1-3話 #つめこです。 (前書き)

1-2話の続きの説明が主です。。。。

13話 せつめいです。

「では次は世界についてですね。」

魔王についての説明は有耶無耶な状態で終わり、世界についての説明が始まった。

魔王の説明のときは質問したからなかなか話が進まなかつたので、今日は質問しないつもりで静かに聞くことにした。

まず、種族について。

この世界には『人間』、『魔族』、『エルフ』、『悪魔』、『バンパイア』、『魔獣』、『聖獣』、『亜人族』、『精靈』などの様々な種族が存在する。大まかに善とされている『人間、エルフ、精靈、亜人族』と、悪にされている『魔族、悪魔、バンパイア、魔獣』・・・そして、中立とされている『聖獣』、という風に分けられる。

種族を善と悪に分けられているのは大陸のつくりにも関係する。

この世界は大きな1つの大陸から成り立つており、ちょうど大陸の真ん中の辺りで右と左・・・聖大陸せいたいりくと魔大陸またいりくに分かれている。瘴氣が渦巻く魔大陸に住むことができる種族は、穢れている（人間談）

ということから魔族や魔獸は「悪」とされている。当然差別もある。

・・・うわ、人間うぜー・・・あ、私元人間か。

『聖獸』は中立とは言つたが、正直気まぐれなだけ。味方したい人には味方するし、嫌いな人はとことん嫌う。『精靈』は気に入つた人、もしくは者に力を貸す。主に人間。『魔獸』は知性がなく、食べるためには人間を襲う。もちろん魔族も。だいたい話せる魔獸は『聖獸』と呼ばれ、魔獸よりも圧倒的に強く、
揉められている（主に人間に）。

『魔族』と『人間』の違いは3つ。

1つ目、見た目の違い

魔族は目が髪、もしくは両方が漆黒。また、人によつては耳が尖つてしたり、牙があつたりする。

2つ目、体の構造

作りは同じだが身体能力や魔力の量、魔法の使い方などが違う。身体能力も魔力の量も魔族のほうが人間より断然多い（もともと、その力に嫉妬した人間が人間と魔族の種類を分けたとか）。魔法の使い方の違いは、魔族は自分の中の魔力を魔法に変えて使い、人間は魔力を契約して精靈に渡して、精靈に魔法を使って貰う という違ひだ。

3つ目、感情の違い

同族であろうと殺してしまつる人間とは違い、魔族はとても仲間思いで愛情が深い。その反面、魔族は敵には容赦がないという習性を持つている。

「・・・説明はこんなところでしちゃう。」

ユウがふうと息を吐く。

「ありがとつユウ！」

ギュウ

抱きついてみた。だつていろいろ知れて嬉しかったし。

愛情表現は必要だよね！

「・・・フェノ様・・・」

ユウは微笑みながら頭を撫でる。

・・・よかつた。ユウがあつち系の人じゃなくて・・・。

途轍もなく失礼なことを考えながら私は眠る。

明日は魔法の使い方を教えてもらおう。その為に頭を整理しない
と・・・。

だつて私の体は子どもなんだよ？睡眠は大切だよね～。

グリムゾンの声が響いて五円蠅いです。

・・・ジウシナウ・・・?

1-3話 サンタです。（後編）

ところ」と

次からは魔法についての話になると想います。。。

1話 めりあ。 (前編)

すこません (汗)
魔法についてこいつとこつしましたが
先に進みました。。。

1話 まちです。

異世界に来て2年が経つた。

え？ 早い？ いいんだよ・・・多分。

この2年間、魔族の人達が新しい王のことでの混乱が治まるまで外に出られなかつたが、別に暇じやなかつた。

魔法の練習したり、こつそり城を抜け出したり（勿論秘密で）・・・

というわけで今から街へ行くんです。この前ユウにばれて酷い説教されたけど・・・忘れたな（笑）

ま、行く前に許可を貰うことと魔王だと隠すことが条件でOKされたが。

「いんにちわー。マリさん。」

街の市場で歩く、優しそうなおばさん・・・マリさんに声をかける。私が初めて街に来たときに良くしてくれた人だ。茶色の髪と漆黒の瞳が妙に似合う人だ。

「ねやねや。 うそにうそ。 今日も元気かい? フン。 ちやん。」

「はー。 今日も元気ですー。」

「ねー。 嬢ちゃん。 今日も来たのかー。」

「うん。 わー。 ジルさん。」

「ねー。 フン。 ちやん。」

「ねー。 フン。 ちやん。」

「こわこと私の周りにおじいちゃんが集まつてへる。 集まつてへるのこじれだけに、 集まつてへる。」

「あー。 フン。 ちやん。」

「ほんとだーーー。 あわせーーー。」

「・・・ フン。 おねーちゃん。」

「おー。 フン。 ちやん。」

「私と同じへりこの子達が男女問わず近付いてへる。」

「うん。 一緒にあそぼつかー。 レーー。 ちやん。 ハー。 ちやん。 ルン。 ちやん。 レクト君。」

話しかけてきた順番に名を呼ぶ。

みんな眼が髪のどちらかが漆黒だ。だが私のような両方漆黒な人は少ないらしく、

何故か人を惹きつける魅力があるらしい（コウに聞いた）。

私は周りのお母さんたちに「じゃあね」と言つて子どもたちと広場へ走つていく。

「・・・子どもなのに素直でいい子だねえフホホちゃんは。」

「ああ。まるで自分の子どものような錯覚に陥つてしまつた。」

「私たちは全員家族もみたいなもんだらうが。」

あつはははは。集まつた人達は朗らかに笑いあつた。

私の見せる一面がどれだけの人の心を和ませているか、私は知らない。でも、

その一面がすべてではない」とは私を含め全員が知つてゐる。

だつてもともと魔族は戦いに飢える種族なのだから。

「今田せじりあるの? 昨日みたいに小さな魔獣と戦う?」

「うんー。うこかなまじゅうになり勝てるもんー。」

「・・・レーノちゃん。今日はまほつのれんしゅうしたい。」

「ルンちゃん。それはいい元氣。私はこのれんしゅうしたい。」

「みんな。今日も森にこいがせー。」

上から私、レーノちゃん、ルンちゃん、ミリちゃん、レクト君の順だ。

魔族は戦いを好むもの。例えそれが小さな子供でもあります。

そして私も。

「じゃ、今田も森に行こー。」

フンフーン 楽しみだなあつとー。

1話 まちです。（後書き）

レーノ 種族：バンパイア 性別：女 属性：火

メモ：性格は明るく、男勝り。髪はオレンジ。瞳は漆黒。

ミニ 種族：魔族 性別：女 属性：風

メモ：間延びした話し方で、いつものんびりしている。
髪は銀色。瞳は漆黒。

ルカ

種族：魔族 性別：女 属性：水

メモ：気弱そうな話し方だが気は強い。

髪は漆黒。瞳は水色。

レクト

種族：魔族 性別：男 属性：闇

メモ：活発で直ぐに首を突っ込んでくる。

髪は漆黒。瞳は紫。

2話 てんぐです。

「んじゃあ、今日も行つてくるね～。」

「はい。フェノ様。」

「ウに軽く告げ、今日も街へ行く。」

「あ、フェノネリア様。」

門でルスオに呼び止められた。

「最近魔獣が活発に行動しております。お気をつけ下さい。」

「魔獣が？・・・ん。分かった。んじゃあね～。」

元気に手を振つて街へ向かう。

・・・魔獣がね～。レーノたちが危なくないよつに先に確認しこうかな・・・。

カクツ と行き先変更し、森へ向かう。

「強いのがいるといいのになあ～ ～ん？なんか早速おつきな魔力発見！

魔獣か？魔獣のかつ！？楽しみー！ー！ー！

口元をニヤアと歪ませる。

これだけ強いなら本氣、出して遊べるかも

「ハハハ…」

ガサツ 髪に草を付けたまま魔力の元へ。

で、そこに居たのは・・・

「・・・聖獸！？」

でした。

綺麗に靡く銀色の毛。神々しいオーラを放ち、澄んだ空気を漂わせるような

美しい姿。そして光を宿した漆黒の瞳。

ユウに教えてもらつた、正しく聖獸

てんろう
天狼の子だつた。

うわ〜。想像してたより断然綺麗・・・。それに下が赤くて凄く際立つ・・・つて、赤？

確かに赤だけど・・・つて、うん？まさか、血いいいい！？

天狼は下の方を赤く血で染め、じつと動かない。

早く治さないと

「『この者の傷を癒したまえ・・・』^{ヒール}『癒し』！」

ボウウウウウ

頭を膝の上に乗せて、魔法によつて光つた手を傷口に乗せる。まだ子どもだったおかげで普通に動かすことが出来た。

ただ子どもだからこそ、大分衰弱しきつっていたが。

「 くつー！」

治りないー？いや、治つてる。治りが遅いんだ！

このままじや間に合わない。

せつかくの遊び相手を死なせてたまるか！

『治れー！』

魔法でもなんでもない言葉に辺りが震えた。

そしてその言葉と共に傷が塞がつていぐ。

「・・・え？」

天狼の激しかった呼吸が落ち着き、穏やかになっていく。

「……せつきの私の言葉……魔法じゃなかつたよね……？」

でも魔力を帯びている言葉だった。

「……なぞだね。」

私の声が虚空に響く。

「おーい！ フエノちゃん！ 」

「フエノちゃん。いる〜？」

「……あ、みつけた。」

「おつ！ ほんとだ！」

いつもの四人の声に顔を上げる。

「あれ？ みんなどうして此処に？」

「……フエノちゃんの魔力をかんじた。……私、魔力よくかんじるから。」

魔法を主に使うル力は魔力探知が上手いみたいだ。

魔族とはいえ魔力を感じるのはそれなりの魔力がないと無理らしいのだが……

（勿論私もできるが）ル力を含め、この四人は大分優秀みたいだ。

「あれ！？そのおおかみはなに？」

「ああ・・・」の子はね・・・

私の遊び相手 だよ！」

救うことが出来た、私の遊び相手。

・・・早く成長してね

私が楽しむ為に・・・

2話 てとねりですか。（後書き）

2章から書き方を変えてみました。。。
・・・難しかつたので（汗）

更新日や書き方、キャラの性格とかよく変わると思いますが、
見てくださいってありがとうございます。。。

「えいへ・ゴウ。」

「なんとも言えませんが、傷の方は大丈夫でしょう。」

「ほんとっ！？ よかつた～。」

そう言つて私は小さな狼 天狼を撫でる。

「」の子と出会つてから一週間が経つが、天狼は今だ田覚めない。連れて帰つたときは田を丸くして驚いていた。まあ、滅多に見ることのできない聖獣を・・・しかもその子どもを連れて帰つたのだ。誰でも驚くだらう。

傷だらけだつたのは他の生き物（聖獣）に襲われたからだとユウは推測した。

親に守られているはずの子どもが一人なのは、襲われたときに殺されたからだらう、
ということも・・・。

「ふんふーん まだ田覚めないかな～。」

「？ なんでそんなに田覚めて欲しいのですか？」

「なんでつて・・・遊び相手候補なんだもん」

ユウが田を見開き、僅かに冷や汗を？ぐ。

神とも詠われる聖獣を遊び相手になんて・・・

みたいな信じられなそうな表情だ。

「まだ、子どもですよ？」

「成長を待てばいい。」

「怪我しますよ？」

「もうう當りたんでしょう？」

「・・・親がいるかも知れませんよ？」

「なら親と遊ぶ」

「・・・ハア。分かりましたよ。成長するまではこいこいで飼いましょ。」

諦めない私にユウは溜息を吐き、妥協する。

でもねユウ？

「ユウ。私は飼つたりなんかしないよ。一時的に保護するの。」

私の真面目な真剣な表情にユウはたじろぐ。

私は飼つたりなんかしない。だつてそんなことしたたり……

弱くなるかもしれないでしょ？

それだと困るの。だから今は保護するだけ。そりやあ、聖獣には聖獣の生き方があるから、邪魔したくないっていつのもあるんだけどね。

「あー！ フンノちゃん！ あの子のよひすはばぢゅー！」

「だいぶ調子が良くなつてきたよ。」

「・・・・ちょっとだけある？ 何して遊ぶ？」

「あー、じめん。今日は私用事があるのー。」

「・・・・？ なんかあんのか？ フンノ？」

「・・・・うん。 とつても嫌なことがあるの。」

四人が不思議そうに首を傾げる。

私は「じゃあね」と畠と別れ、城へと帰る。

・・・ハア。行きたくないな・・・。

「「さつ、魔王様 お仕事ですよ」」

いつになく不穏な笑顔をむるコウとメリーに、私は絶対に逃げられないことを悟った。

一人はいつも私のことを『フヨノ様』と呼ぶ。だが、私が魔王として仕事をするときには必ず『魔王様』と呼ぶ。今、二人は私のことを『魔王様』と呼んだ。

つまり一人が言いたいのは・・・

『仕事をしる』

・・・だ。

「・・・この山のような紙屑、早くゴミ箱に捨てて欲しいんだけどなあ。」

書類といつも紙屑をね・・・。

「駄目ですよ、魔王様。最近遊んでばかりだつたんですから。」

「そうですー。たあ、さつと終わらしてくださいね？そして私たちの仕事も いよいよ。」

「ウ・・・確かに私は遊んでた・・・。

でもさメリーエメリーエはただめんどくさいだけなんじゃないかな?
しかもその咳は誰がみてもわざととしか思えないんだが・・・。

「・・・「う。帰りたい・・・。」

「どこの帰るんですか?魔王様」

「・・・「う・・・。」

「のう共があーーー!」

3話 ついでにやめよう。（後書き）

一応魔族はなかなか年をとらない種族なので
おじさん、あばさんといつても
見た目は全然若い設定です。。。

4 話 ん・・・おひこや だす。 (前書き)

話のトコロを聞くします。。。

4話 え・・・おつしやです。

「はい、これ。ボアおじさんの呪ついた薬草だよ。」

「おお。いつもありがとー。でも『おじさん』は止めくらいいか?」

中身はもう一〇〇歳ぐらいだが、見た目は二十代なんだから。」

「んじゃあね。また何かあつたら呪ついてねー。おじさん」

私はそつ言ひ、くるつと背を向けて タタタ と駆けていく。

後ろで「うう」という呻き声が聞こえるが勿論無視!!
おじさんはおじさんじやないと変な感じがするんだもん。

「フヨーハちゃん。またおでつだい?」

「うん」

「・・・えらいね。フヨーハちゃんは・・・
・・・いつもいろんな人のためにうごいてて。」

だつて魔王にとつて魔族の人たちは家族みたいなものだからね

民の為に働き、慕われてこそ『魔王』でしょ?それにこゝの人た

ちは好きだし

上機嫌で皆と歩いていると会話が聞こえてきた。

「そういえば、魔王様がお生まれになつてもう2年ね。」

「しかもその魔王様は日々私達の為に尽くしてゐて尊だよ。」

「魔王様の中の魔王様ね。一度お会いしてみたいわ！」

「まだ未熟らしいけど、きっと良い方だろうね。」

・・・なんでだろう頬が赤くなる・・・。

「・・・？ ねえー『まおーさま』ってどんなひとなの？」

レーノちゃんが話してゐる人たちに聞く。他の三人も知りたそうにそわそわし出す。

「ああ。魔王様つていうのはこの魔大陸の王様だ。私達魔族にとつては『もう一人の親』のような
とても大切な人だよ。」

「やうなの？ 会つてみたいなー！」

「・・・わたしも。」

「ん~。わたしも。」

「あ、おれもおれも。」

四人がきやいきやいと騒ぎ出す。

私は温かい目で見守り

「フエノちゃんは？」

はい。爆弾投入～。

「え、うん。私もだよ。」

にこり と皆に笑いかける。

え・・・自分に会いたいって・・・言つてから恥ずかしいんですけど？

四人は複雑な心境でいる私に気付かず魔王の話に没頭する。最初に話してた人たちも、魔王がどんなに凄い人かについて熱心に語っていた。

・・・そーいえば、そろそろ國民達にもお披露目する とかユウが言つてたつけ？

ボー と一人で物思いに耽つていると、精靈の気配がした。

「・・・どうしたの？」

私は誰にも気付かれないように呟く。

その声に反応し、ボウウ と光り、黒紫色の光の玉が近くに姿を現す。

姿を現すといつても見えているのは魔王である私だけなのだが。

この光の玉 間の精靈は唯一この魔大陸で生まれる精靈だ。
人によるが、この闇の精靈と契約を結ぶ魔族もいるとか・・・。

『来るよ。』『人間。』『目的。』『魔王。』『城。』『街。』
『嫌い。』『魔族。』

片言でたくさんの精靈が話しかけてくる。

まとめるといふ。

『嫌いな人間が魔王を倒しに城を目的にしていたが、街に来る
と、いうことだろつ。

迷惑な・・・。

「人間が・・・勇者がくるぞおおおおーー！」

一人の魔族の叫びが辺りに轟いて。

・・・勇者・・・か。

なんで直接城に行かないんだ？

・・・さてどうしようかな。

4話 え・・・やつしやです。（後輩や）

まともな魔王様の仕事の始まりですね。

5話 われは、~~おもひで~~か。（前書き）

なんか読者の話、書かれて……。 。 。 。 。
といつより難しいでや～。 。 。 。

5話 われは、まおつです。

「退きなさいーーー」の魔族風情がつーーー

女性の声と思われる少しへーーーの高い声が響いた。

魔族達はそれを聞き、動かず、向かってくる一行を睨む。

勇者一行・・・

誰もが直感的に理解した。

一行は、金色の瞳と金色の髪を持つ青年を中心に街へとづかずかと入ってきた。

勇者と思われる青年、魔法使いと思われる女性、僧侶と思われる男性、そして、勇者と共に

戦うと思われる剣士の青年・・・。

その一行の勇者以外の三人は魔族達を嫌そうな侮蔑の目で見ていた。

・・・気に入らない。

街中を歩くそいつらを見て、私は不機嫌になる。

真っ直ぐに城へ向かわず、わざわざ街へ来るなんて……。

馬鹿にじょりとしている様にしか見えない。

「……子ども達。家中へ……。」

ついわざとまで盛り上がっていたあばさんと私達を急かす。

四人にも勇者には勝てないと、じにに来る前に死んでいるだろう。決まり悪そうに家に入っていく。

仮にもあいつらは勇者一行だ。

ある程度強くないと、じにに来る前に死んでいるだろう。

「フエノちゃん。あなたも早く。」

「私は大丈夫だよ?」

「……駄目だよ。早く家に」「さやあああああーーー…………？」

勇者一行の一人……魔法使いの女性が魔族の少女を蹴り飛ばした。

「マリテナっ!—!—

「お母さん!—!—」

少女……マリテナを庇つよつに女性が躍り出た。

「魔族のくせにお母さん？ 気持ち悪いのよーーー！」

魔族達の殺氣が勇者一行に集まる。

だが、誰も手は出さない。否、出せないのだ。
勇者だから。勇者だから、魔王じゃないと駄目なんだ。
それほどに強いから、手は出してはいけない。
それが魔族の中の暗黙のルール。

人間たちはそれを『魔族は勇者に手がだせない』と勘違いしている。

だから女性は魔族に容赦しなかつたのだ。
どうせ手が出せないのでから、と。

それを理解し、私の中で何かが弾けた。

「ねえ、お姉さん 」

「・・・なにかしら？ 無粋な魔族の小娘。 」

私が声を掛けたのに驚いたのは、そこにいた全員だった。

「じょ・・・嬢ちゃん！？」
「何してるんだ！？」
「フエノちゃん！」

魔族のおじさん、おばさんが心配の声を上げる。

くす。心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ

ふうと深呼吸して女性を・・・勇者一行を睨む。

「ここに向をしに来た。」

先ほどの無邪気な雰囲気とは打って変わった空氣に、シンと辺りが静寂に包まれる。勇者一行に至っては、圧倒的な殺氣を放たれ、

全員が冷や汗を？いて息を呑んだ。

それを確認し、声を掛けた女性に視線を向ける。

「貴様はしてはいけない事を我の前でした。この罪・・・受けてもらおうか。

『死ね』

それは死の宣言。

私の力を帶びた言葉は全員の耳に響き渡り、女性を死へと追いやつた。

どせり

力なく倒れた女性を見、死んだのだと納得させられた。勇者一行以外は。

「なつ！貴様何をした！？」

「魔族は我らに手出しできないはずだ！」

僧侶と剣士が叫ぶ。

「魔族なら……な。

我が名はフェノネリア。

この魔大陸を治める王

『魔王

だつ！』

私は高々と宣言した。

勇者一行は絶句し、魔族達は酔いしれたように紅潮としていた。

・・・名乗っちゃった 怒らないでね、ユウ

5話 われは、まおつです。（後書き）

フェノ のときは『私』

魔王 のときは『我』
で行こうと思つてます。。。

『我』・・・変ですかね？

あと、『一行』とか感じ間違つていたので
直しました（汗）

次の更新は少し遅くなるかも知れませんので
悪しからず。。。

・・・上手くいった・・・。

周りが絶句している中、私は興奮していた。

天狼の傷を治したときのようだ、魔力を帯びた言葉が命令となつて相手に届いたことに・・・。

いやあー・・・。やれりと思えればできるもんだねー。

顔には出せない口に心がけていたが、それに反し、私の口は弧を描くのみだ

不気味に歪んで笑っていた。

勇者一行はそれを余裕がある と誤解して一步退く。だが、勇者だけは一步前に踏み出した。

「・・・私は勇者だー!」

「お前を討ち取るー!」

「断る。」

断固拒否だ。

いやいや・・・そんな『何故だ!?』みたいな顔しないでよ。討ち取る=殺す じゃん。殺されるの嫌に決まつてんじゃんか。馬

鹿か、お前は。

「くつ・・・なら今つ・・・」

何が『なら』だよつ！？

それにここで暴れないで。ここは私の大切な街なんだから。

勇者は チツ と舌打ちし、腰に差してある剣を引き抜き、振り翳す。

「・・・ユウ、メリー。」

私の声に反応し、私の前・・・勇者の前に闇の玉が一つ現れる。それは徐々に（実際は一瞬）人型をかたどり、ユウとメリーの姿になつた。

ユウが勇者の手を蹴り、剣を落とさせた。

カシャン

剣を落とした本人には何が起つたのか分からず、私と、突然現れた二人を何度も見比べる。

残りの勇者の仲間たちも周りの魔族達も驚いていた。

「あ・・・あればミージェル家の息子とリオネラ家の娘じゃないか！」

「つ！ユウル＝ミージェル様とメリーネル＝リオネラ様！？」

・・・あ、魔族たちの驚く理由は勇者たちとは違ったみたい・・・。

てか『様』付けで呼ばれるほど凄かつたんだ。こっちが吃驚だよ。

「・・・まあいいか。 ねえコウ、メリーア

私の呼びかけに一人が片膝をつき跪く。

これは私が『魔王』のときには普通のことだ。

「どうかされましたか？魔王様。」

メリーアが顔を上げ、凜とした表情で聞いてくる。私はこいつと笑い『お願い』する。

「この人達・・・殺して？ 私はめんじくさいの。」

そんな物騒な台詞は、無邪気な笑顔を浮かべる私には何故か似合つていた。

誰もが台詞の意味を理解しながらも私に見惚れていた。

魔族の皆も、見慣れているはずの二人も、勇者たちも。そして木も、鳥も、空気も、精霊も・・・誰もが、ね。

「「はい。魔王様の手は煩わせません！！」」

その言葉と共に一人が動き、勇者たちに襲い掛かり・・・終わら

せた。

実に呆氣なく。

ドサドサドサ・・・

事切れた三人に私は冷たく冷酷な声で告げる。

「醜く醜悪で、愚かな人間共。死の中で己の無価値を思い知るのだな。」

・・・にしても弱つ。まさかあんなに呆氣なく終わるとは・・・。君らには恐れ入つたよ（別の意味で）。てかコウとメリーに普通に勝つ私つて一体・・・。

「ヒーリングフェノ様？」

コウの優しい声に ゾワリ と悪寒が走る。

ナンデダロウ？嫌ナ予感シカシナイヨ？

「・・・な・・・何かな、コウ？」

「お披露目はまだ先だと言いましたよね？何のために準備をしていたと思っていたんですか？」

お披露目の際に混乱が起きない様に、と頑張っていたというのに・・・まさかこんな街中で、

こんな目立つ所で暴露するなんて・・・。ぼくの苦労は一体何だつたんでしょうかね？フェノ様？」

ユウの説教はそれから一時間続いた。この人目の多い街中で。しかも満面の笑顔で。

気付けば周りの者たちが微笑んでその光景を見る始末。

た・・・助けてくれえ・・・

6 話 かわいがゆ。 (後書き)

ユウは結構腹黒・・・?

おかしいな。

もつと純粋キャラだったよ! うな・・・

7話 もいなんです。

「・・・で、何これ？」

部屋を埋め尽くすほどの手紙を前に私は咳き、昨日の事を思い出す。

昨日・・・勇者達を片付けたユウに連れられ、私は街の人たちとろくに話もせず城へ連れ戻された。街の人たちは呆然としていたから話せなかつたのはしょうがなかつたのだけど。

そして何だかんだで自分の部屋に戻り、一人で寝るには大きなベッドに入った、と・・・。

で、目を覚ましてみれば手紙が山積みになつていた といつわけだ。

「あ、起きましたか。フェノ様！」

メリーが両手で抱えるほどの手紙を持って、私の部屋に入つてきた。

「・・・何なのこれ？」

「ああ……これはですね……ら……ラブレターです//」

「……は？」

「……ラブレターだとう？」

「その……昨日のことでのエノ様のお住まい（城）がばれてしまいました、前から心を寄せていたという男共が城に手紙を持って、殺到したんですね……」

「……」

「の……ロリコン共がああああああああ……」

何！？魔族はロリコンしかいないのつ！？カイルみたいな！！

「ええとですね……。数としてはこの魔大陸の未婚の男性のほとんど、ですね。」

「……グハツ。」

「んだけ私にいいいい！」？

「……メリー。」

「はい？」

「焼き払つて。」

「はい 『不潔な男性共の心を燃やせへ刃へ』 『清純の炎』 ファイア

』

ボオオ！！

私の言葉にメリーは笑顔で答え、それ呪文としていいの？ と聞きたくなるような呪文で手紙を燃やしきくした。まあ口に出して言え、内密なやうなあれ呪文として使えるのだが。

別に、イメージが出来ていれば無詠唱でもいいけたりする。勿論私は無詠唱でもOK、と。

「といひでフホノ様？ 手紙とは別に聞こえてくるプレゼントの方は・・・」

「使えるやつ以外は燃やして捨てて。」

「かしこまりました」

手紙は使いうがないがプレゼントなりあるだろ。

もういえるものはもういらない 後はこうない

そして私は自分がこれだけ好かれているということを忘れて街へと向かった。

・・・結果。私は馬鹿だった。

「魔王様っ！！」

「魔王様っ！！」

「魔王様っ！！」

「魔王様っ！！」

「・・・・・。」

どうして私は街へ来てしまつたのだろうか・・・。

街の人たちは私を見るがいなや群がつた。

ろくに動けない状態で私は立ちすくむ。

でもまずは・・・呼び方を戻してもらわないと・・・。

「・・・えーと?みんな?」

「」「」「」「はいーーー」「」「」

「・・・(汗)。その、何時もびおりでいいんだよ?」

「だ、駄目ですよ魔王様!」

「そうです!」

「あなたは魔王様なのですからーーー。」

「・・・・。」

その皆の親しみの目を見てしまつと邪険に扱つことも出来ず私はどうしようもなかつた。

「だ、だから私のことは何時ものよつと・・・。」

「駄目ですーーー。」

「・・・うう。何時ものよつと・・・。」

「「「駄目ですーーー。」」

「・・・えええ・・・。」

長い長い話し合いで、やつと私のことを『フエノ様』と呼ぶことに収めたのは既に日が沈んだ後だつた。

レーノ達には会つことも出来なかつたよーーー。

しかも帰りにはストーカーにも会つし・・・。(泣)

災難な一日だつた・・・(泣)

7話　さいなんです。（後書き）

魔王は皆に好かれてます（笑）

もともと街の人たちはフェノネリアという名は知らず、
フェノだと思っていたんですね。
だから本当の名を知ることで魅力に当てられてしまった人たちも
居るわけです。。。

8話 ともだちです。（前書き）

今回はだいぶ今までとは違つ書きの方です。。。。

「・・・私たちはよわい。」

「うん～・・・。」のままだと・・・。」

「・・・まもれない・・・でも、」

「などしても俺たちは・・・」

「・・・あもつたこー。」「」

* * *

「・・・レーノひやへんー!!! ひやへんー! ルカひやへんー! レクト
くへんー。」

シーン

「・・・壁へだてに立ったの・・・?」

何時もの集まり場所の噴水広場。

其処に皆が居ると思つて行つたが、皆どころか人一人も居なかつた。

・・・何時もなら待つてくれるのに・・・。

はつ。もしかして私が魔王だつて隠してたから?
それとも本名を隠してたこと・・・?

「・・・はあ。 しじうがないか・・・。」

嘘を吐いていたわけだはないが、騙していたのは本当のことだし・
・。

「・・・よし。開き直らう! と、いうわけで・・・帰りますか! -

ぐるり と回転し、来た道を引き返す。

前世からの順応力は未だに健在のようだ。

私は悲しみながらも、次は何をして遊ぼうかと笑っていたのだから。

「あ、めんどくさいな・・・。魔法で帰るか・・・。』瞬間移動『レポート

^』 !

しゅん。 素つ氣無い音と共に私は城へとテレポートする。

結構な上級魔法だつたりするが私は知らなかつたりする魔法だ。

「・・・はい?」

城に帰つた私はユウの話を聞いて絶句した。

「ですから新人希望者ですよ。フェノ様。」

「……何の?」

「城で働くメイドと騎士のです。」

「……誰が?」

「レーノ、ミニ、ルカ、レクトの四人です。まだ子どもですがなかなか育てがいがある子達なのですが……えと……お知り合いですか?」

「……よろしくおねがいします!フェノ様」

「……と……友達。」

「……ああ。フェノ様が探しておられた……。」

にこにこと笑う四人は、ここ一週間会えなかつた、あの四人だつた。

実は私が魔王だと分かつたとき、四人はただ驚くわけではなくショックを受けたらしい。

それは魔王だと隠していたことで受けたショックではなく、この力

差では『守ることができない』
という、主従関係的なことで。

四人は私の本当の名を知ると同時に声が聞こえたという。

『魔王の力となれ』

と。

その謎の言葉は何故か心地良く、満たされるような安心できる声
だったらしい。

そしてその言葉は四人の生きる意味を示した言葉だという。

まるで神の御告げのようだ。

「・・・それで、私の力となるため 私を守るために一週間
話し合つて、
その結果、城で働くこと・・・？」

「「「「はい フエノ様」」」

「・・・あなた達はそれでいいの？ あなた達は自分の生きたい
ように生きたらしいんだよ？
それに・・・そんな縛るようなこと・・・？」

「ちがつよ。フエノ様。」

レーノちゃんの声がいつも以上に凜と響く。

「…？」

「私たちは～フエノ様のもとではたらきたいの～。」

「…・・・//」やあやん・・・。

「…・・・もちあん、私たちのいしで・・・。」

「…・・・ルカちゃん・・・。」

「そうだよ。俺たちはそのためにここにいる。」

「…・・・レクト君・・・。」

「フエノ様は私たちのあるじでかぞくでともだち、そしてとつて
もたいやせつな人」

「…・・・レーノちゃん・・・。」

レーノが一歩前に出て跪く。残りの三人もそれと一緒に膝をつく。

「私たちがいつまでも魔王様とともにいることをおゆるしくださ
い。」

四人は微笑みを浮かべて私を見つめる。

そこにあるのは純粋な忠誠心と、曲げられない強い意思だった。

「・・・レーノちゃん、ミーちゃん、ルカちゃん、レクト君。・・・いや、レーノ、ミー、ルカ、レクトよ。

貴様らは生涯もつて我に恩くし、我に全てを捧げ、我的為に力を使
い、どこまでも付いて来れるか?」「

「…………」

「……では強くなれ。我を守り、奮められないとぐらいに、強く

「…………」

「……」に、 破れぬ契約を
！」

8 話 ともだちです。（後書き）

と、いつまで主従契約しました とにかくになります。。。

内容的に残酷な場面はないんですけど・・・、

皆さんはどういうような場面が好きですか・・・？

9話『てんぐ』（前書き）

天狼視点です。。。
名前も決まります。。。。

・・・「」は?

「」は魔王城だよ。狼さん。」

誰も居ないと思っていたから、返事が返ってくるとは思いもしなかつた。
しかもこんな近くでとは・・・。

！！ 何者！？

天狼として、こんな近くの者に気付かぬはずがないとこいつの。」

「えーと・・・私はフェノ、だよ。」

そこにいたのは美しく、愛らしい少女だった。

キヨトンとした仕草がその愛らしさを一層強調する。

だが天狼すら気付けない気配・・・それは無に近いほどに弱いか、もしくは自分よりも格上かの一択しかない。そして、無に近いほど弱ければ我の気に当たられて既に気を失っているはず。だが、この少女は気を失つじにか優しく微笑んでいた。

それは少女が自分より強いといつ事だ。

しかもその少女から敵意は感じぬし、敵意を玉ねぎとも思えない。それどころかこの少女と話される事を歓喜に感じ、懐かしくも心地良くも思えた。

「…………」

「何が？」

「…………」

「…………」

「…………」

魔王城 と…………

「…………」

我は何故…………

「怪我をして森にいたんだよ? 覚えてないの…………？」

怪我…………逃げておったんだじゃ…………やつか

…………アーリア…………

それで、傷を…………

「ふうん。ドラゴンから……。ところで傷はもう大丈夫?」

うむ。傷は完治しとる。お主が治してくれたのか?

「まあね~。」

「! ! それは^{まいと}真か! ?

「・・・・そうだけど・・・? どうして?」

治癒魔法は上級魔法で、人間には途轍もなく難しいと聞く。しかも、あの傷を治すとは・・・。お主は一体・・・?

「あー。そもそも私人間じゃないよ? ここは魔王城なんだから、人間はいないよ。」

そ・・・・そうであつたか・・・・。しかし種族はどうであれお主は命の恩人。
それ相応の礼をしたいのじゃが・・・?

天狼の誇りにかけて恩人を無碍に扱つたりはしない。
人間ばかり見ていたおかげで、そう強く思うようになった。
人間の醜悪さや醜さを見ていたおかげで・・・な。

正直、この少女にもいい思いを持つていない。

種族は違えど、あれらと同じ、人の形をとつてているのだから・・・。

しかし、少女は違つた。

「んじゃあ、私と戦つて」

「・・・は？」

「もともと助けたのは遊び相手に丁度良かつたから。・・・まあ別に断つてくれてもいいよ。」

その斜め上な答えには呆然とするしかなかつた。まさか『戦え』とは・・・。

・・・ク、ハハハハハハハハ！！

突然笑い出したからか少女はキヨトン と首を傾げる。

人に笑うなど何年振りだらうか？

ましてや格上の少女に隙を見せるなんて・・・。

面白い。

私は今は完全ではない。だからその要望は断らせてもらひやつ。

その言葉と同時に少女が シュン とつな垂れる。

代わりに・・・契約をしてくれ。

「・・・え？」

我はお主を気に入つた。そもそも命の恩人じやしな。
それに・・・
契約したら、いつでも戦えるぞよ？

ニヤリと妖しく笑つて言つた。

しかし、それを聞いた少女は・・・

……言つたね？」

と自分以上に妖しく、美しい笑みを浮かべて言った。

ソクツ
と恐れと美しさを同時に感じたのだった

では、契約、しようかあ、そこそこ、私を魔王なんだよ。

へ？
・・・ま・・・魔王！？

「ふふふ これからよろしくね、ランフォン」

しかも既に名前決定いいいいいい！？

前途多難な予感がするぞよ・・・（汗）

9話『てんわい』（後書き）

天狼の名前は『ランフォン』です。

フェノと出会ったときは小さかったですが、
目を覚ましたときは、フェノを乗せれるぐらいの大きさになっています。

怪我で体が小さくなつてただけで、

大きいほうが本来の姿、というわけです。

・・・一応、オスです。

ついでに、既に100歳超えてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6573y/>

魔王はここに

2011年12月16日18時45分発行